

## 1. 開催概要

展覧会名	現代美術のハードコアはじつは世界の宝である展 ヤゲオ財団コレクションより	
開催施設名	会期	入場者数
東京国立近代美術館	2014年6月20日～2014年8月24日	3.7万人
名古屋市美術館	2014年9月6日～2014年10月26日	1.1万人
広島市現代美術館	2014年12月20日～2015年3月8日	0.7万人
京都国立近代美術館	2015年3月31日～2015年5月31日	1.6万人
<p>【総括および東京会場】本展の主旨としては、①トップクラスの現代美術作品が一堂に介する場をつくること、②現代美術作品が私たちの生活や社会と無関係ではないことを「新しい美」「記憶」といった章構成によって実証すること、③アート界を美術館とは違った角度から支えている「コレクション」という存在を周知すると同時に、美術作品の市場性について客観的に捉える視座を来館者に提供すること、があった。</p> <p>①については、74点の作品(うち1点は本補償の対象外)を借用・出品することができた。</p> <p>②については、たとえば『毎日新聞』(岸桂子 8月6日夕刊)の次のような評価を得ることができた。「10章のテーマ設定は奇をてらったものではない。だが、美学的・文化経済学的の双方から書かれた各章の解説が示唆に富む。」</p> <p>③については、アカデミック・ジャーナリズムを謳い影響力のあるウェブマガジンとして知られる『シノドス』が、展覧会担当者へのインタビューという形で、6ページにもわたる記事を掲載したり、『東洋経済オンライン』からの取材があったりしたことなどから、通常の美術展とは異なる拡がりを持たせたと言えるだろう。</p> <p>またいわゆる共催展でなかったこともあってか、東京会場においては、『SANKEI EXPRESS』(原圭介 6月30日)、『産経新聞』(黒沢綾子 7月3日朝刊)、『読売新聞』(井上晋治 7月3日朝刊)、『日本経済新聞』(窪田直子 7月9日朝刊)、『朝日新聞』(西岡一正 7月30日 夕刊)、『毎日新聞』(岸桂子 8月6日夕刊)、『日本経済新聞』(平野啓一郎 8月7日朝刊)など京5新聞社全てが署名記事を掲載したことは特筆できる。</p> <p>①②③すべてが実現できたためか、その他の媒体の反応も非常によく、また芸能人などのインフルエンサーのブログやツイートなどに紹介されたこともあってか、ある時期に東京会場で行ったアンケートでは、当館に初めて来館した人の内訳が41パーセントに上った。こうしたことから、これまでほとんど美術館に足を運んだことのない層を新規に開拓できたのではないかと考えている。</p> <p>【名古屋会場】この展覧会は、現代美術の著名な作家たちの質の高い作品を展示したものであり、観客に現代美術の素晴らしさを存分に味わっていただける企画だった。一方で、コレクターや美術品の価格、価値について考える機会を提供するものともなった。その点については、中日新聞の記事に次のように採り上げられた。「アートの値段を話題にすることは、美術館では避けられてきた。芸術は、市場価格ではなく、美的価値から語るべきだとされているためだ。とはいえ、現代アートをめぐる市場が激化していることも事実。つまり、多様な価値をまとうのが現代美術であり、「世界の宝」というわけだ。(中略)「縁のない世界」などと思わず、コレクターの気分で会場を見れば、普段とは違う現代美術の価値が味わえるだろう。」(宮川まどか 2014年9月30日 中日新聞朝刊)</p> <p>【広島会場】現代美術の巨匠による代表的な作家や、世界的に著名な現存の人気作家による作品を紹介でき</p>		

る稀な機会となっただけでなく、本展のもう一つのテーマでもあった作品の「価格」と「価値」の関係(または「アート」と「アート・マーケット」の関係)についての考察を促す契機を提供することができた。会期中に会場出口で実施したアンケートでは、81%が「満足」「やや満足」と回答している。

【京都会場】「長く、変わったタイトルだが、内容は折り紙つきと言っていい。(中略)すべての作品が1人の企業経営者の審美眼によって集められた事実に感嘆させられる。」(渡辺亮一「驚異の審美眼」『毎日新聞(夕刊)』2015年4月15日)「今生きている時代の息吹を伝えつつ、日常の場で見つめていたいと思わせる作品。それがチェンさんにとっての“名作”であり、美術コレクションの基本でもあると感じ取れる。」(木村未来、淵上えり子「アートと出会い暮らす」『読売新聞(夕刊)』2015年5月20日)

## 2. 美術品補償制度の活用による国民的利益に関する取組結果

今回、軽減された保険料の用途としては、「(大学生と高校生の)入場料の無料化・軽減等」「展示作品の質・量の充実」「教育普及活動の充実」を予定していた。

【東京会場】総入場者数 36,601 人のうち、大学生は 4,912 人、高校生は 871 人で、それらの合計は全体の 15.8% に相当する。この割合は同年度の当館の平均(10%)を大きく上回る。また 1960-70 年代の美術になじみのない世代をメインターゲットとした「高松次郎ミステリーズ展」の 13.5%も上回る。このことから、軽減された保険料の用途は、本展において、非常に高いレベルにおいて目的を達成したといえることができるだろう。

展示作品の質・量の充実としては、目標に掲げていたアンドレアス・グルスキーの《May Day IV》、アンセルム・キーファーの《金色の髪マルガレーテ》、マーク・クイン《神話》のすべてを借用することができた(ただしクイン作品については屋外彫刻作品であることなどを理由とし、本補償制度の対象外となっている)。クイン作品は屋外の通りに面した無料ゾーンに設置されたことや、写真撮影が可能になったこともあって、本展のシンボリックな作品となった(ただし輸送や設置場所等の問題から、東京会場のみでの展示となった)。

【名古屋会場】小中学生を無料としたことにより、子供への教育の充実をはかった。小中学生の入場者数は入場者総数 10,949 人中 457 人であった。また、教育普及活動の充実をはかるため、出品リストと展示室最後に設置したゲーム「コレクター・チャレンジ」の説明書を作成した。会期中、9月7日(日)にこの展覧会を企画した東京国立近代美術館主任研究員の保坂健二郎氏による講演会を開催した。展覧会開催の経緯やコレクターのチェン氏に関する事、作品の価格と価値についてなど、盛り沢山の内容でご講演いただいた。この講演会への入場者は 110 名だった。

【広島会場】美術作品の価格と価値との関係への着目を促すデバイスとしての「コレクター・チャレンジ」は、担当学芸員による解説付きプログラムとして開催し、260 人(総数)が参加、その関係性を改めて考察する機会となった。大人にも子どもにも、よりいっそう現代美術に親しんでもらうことを目的とし、Q&A方式のガイドブックを作成、来場者に無料で配布することにより、「難解」であると思われることの多い現代美術を楽しむ手がかりを提供することができた。本展に大作 3 点が出品されていた人気アーティストの杉本博司氏を招聘したレクチャーには 166 人が参加。鉱物や歴史的な文書、仏像などの古美術の「収集家(コレクター)」としても知られる杉本氏のレクチャーを通じて、「収集する」ことの楽しみのみならず、収集品がいかに彼自身の作品制作と密接に結びついているかを知る機会となった。また、市内在住の現代美術コレクターを訪問するプログラムを 2 回実施し、各回 20 名、総 40 名が参加。普段の生活では接する機会の少ないコレクターに直接会い、コレクションを実際に見ることで、アート界の一端を担う「アート・コレクター」の存在を知る機会を創出できた。

【京都会場】記者発表や講演会、2 度の解説会で、美術作品の経済的価値や中国・台湾の近現代美術紹介、参加型のゲームなど、これまでの「名品展」とはちがう要素を繰り返し強調した結果、会期中実施したアンケートに

よれば、総入場者のうち、10代、20代の若年層が約27%、30代、40代、50代の中年層が約40%、60代、70代の高年層が若年層と同じ約27%と(残り約6%は年齢未回答)、幅広い世代に名品を鑑賞する機会を提供することができた。内容も、全体の70%以上が満足を示しており、通常の広報媒体ではなく友人や知人を通じて展覧会を知った人が全体の1/4以上の約27%と、「おもしろさ」が口コミで広がったことが見て取れた。

### 3. 事故の有無(軽微な事故、ヒヤリハット事例も含む)

特になし

### 4. 安全配慮に関する特別の対応

【総括および東京会場】大型作品や繊細な作品、また重量のある作品が多数あるため、残業を前提としないスケジュール調整を行った。これにより集中力を維持することができ、「ヒヤリハット」のような事例を起こすことなく展示・撤収作業ができたものと思われる。

展示と撤収のレベルを確保するために、各会場の展示において、同一のコンサベーター(1人)とキュレーター(1人)とアートハンドラー(3人)が同行することとした。しかしながら、全部で4会場の開催となったため、キュレーターの費用負担(今回は基本的に所属館が負担)や業務負担が相当の量となった。こうした点は、今後、検討が必要になるものと思われる。

ハンドリングの利便性を考えて、サイズが大きすぎたり形状が輸送に向かないクレートについては、東京への作品到着後、所有者の了解を得て、巡回用のクレートを作成した(返却時はオリジナルのクレートを使用)。

アンセルム・キーファーの《君の金色の髪マルガレーテ》は、画面全面に藁が使われており、鑑賞者の「触ってみたい」という欲望を喚起してしまうことが予想されたため、ステージを作成し、通常以上の「結界」を設けた。

今回はレンダーが台湾にある財団ひとつであったため、展示金具の改変等について、責任者とのやりとりを、SMSで時差なくやりとりすることができ、スピーディーな回答を得ることができた。言い換えれば、欧米がレンダーの中心となったり、レンダーが複数にわたったりする場合には、回答を得るまでに時間がかかることになる。つまり、今回以上の余裕のある日程が必要になる。今後、今回のような、重量があったり展示作業が幾分複雑になる現代美術展の際には、レンダーの構成状況によっては、スケジュール作成の際に留意が必要と考える。

【名古屋会場】サイズの大きい作品の輸送において、あらかじめ受けとなる木枠を用意するなど、安全面に考慮した。

【広島会場】すべての展示作品に結界を用意した(通常は、一部の展示作品のみの場合が多い)。通常配置する以上の監視員を特別に雇用し、監視を徹底した。

【京都会場】京都会場では、作品の搬入時、アンセルム・キーファー《君の金色の髪マルガレーテ》が荷物用エレベータに入らず、2Fの展示室に上がらないという事態が発生した。大階段を使って人力で2Fに上げることは不可能ではなかったが、エレベータでの移動よりもリスクが増えるため、作品の安全を最優先に考え、やむなく未出品とする判断をした。

## 5. 紹介事例・今後の改善点等

全4会場の合計の入場者数が 71,125 人。決して「大量動員」とは言えず、また申請の見込みとして掲げた 8.9 万人に対して達成率が 79.3%となってしまった。未達成の理由としては、いくつか考えられる。①奇抜なタイトルが、東京以外では「敬遠」の理由となってしまったかもしれないこと。②奇抜なタイトルとメインヴィジュアルに選んだ作品(マーク・クイン)のテイストが、事実上展覧会の熱心なユーザーとなっている女性層に響かなかつたかもしれないこと。③ヤゲオ財団コレクション自体の知名度が国内ではほとんどなかつたこと、④現在の現代美術ファンはもっと体感型の作品を期待しているかもしれないこと、などである。ただし、東京会場における若年層の割合の高さに見てもわかるように、今後の美術館の「担い手」であり重要な「ユーザー」である若年層の関心をつかむことは、これまでの展覧会以上に達成できたと言えるだろう。今回の反省点を十分にふまえて、今後も大型の現代美術展が、より効果的に開催されていくことを期待したい。

なお現代美術作品では、素材が脆弱であったり体験型であったり屋外に設置されたりするような作品も少なくない。今回は、マーク・クインの《神話 スフィンクス》は、屋外設置作品であることを主な理由として補償の対象外となったが、事実上、この作品は東京会場における展覧会のシンボリック作品となり、その前で記念撮影をする人々がほとんどであった。今回、同作品については、共催者であるヤゲオ財団が輸送経費のほとんどを負担したことにより借用が実現したが、もし補償の適用外ということで借用を断念していたならば、ひょっとすると、来場者数はもっと減つたかもしれない。そもそも、こうした大型の作品を展示できないようでは、各国がしのぎを削るアジアの現代美術シーンにおいて、日本が、傑出したプレゼンスを持てるようになるとは言えない。現状では、保険の適用の可能性が(相対的に)高い作品を補償対象外にするというのが方針になっていると思われるが、今後の日本の文化シーンのことを考えた際にそれが果たして妥当なのかどうか、検討が必要だと言えるのではないか。ちなみに本作品は6月から3月上旬まで展示されたが、洗浄を二度行っただけで、大きなトラブルはなかつた。

なお本展は、本補償制度とは別に、文化庁の「平成26年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」の助成を得てバイリンガル化をはかった。そうしたこともあってか、たとえば東京会場における外国人の入場者数は2,178人と全体の6.0%を占めた。これは同年度の年間平均2.4%を大きく上回る。

良質な展覧会を行い、適切にバイリンガル化を行えば、国外からの観光客を美術館に誘うことはまだある程度可能だとも言える。ここから言えるのは、国家補償制度による展覧会の実現は、決して、日本国民に対する直接的な利益となるだけでないということだ。それは、国外からの観光客を刺激し、美術館への来訪を促し、この国の文化活動への関心を高めることにもなる。そしてそれは、結果的に、国民の間接的な利益ともなる。この事実を今一度、関係者は留意しておくべきだろう。制度の実施から数年が経った今、「補償制度の活用による主な国民的利益」が許容する範囲についての議論が行われてもよいのではないだろうか。

6. 展覧会の収支決算書

東京国立近代美術館、名古屋市美術館、広島市現代美術館、京都国立近代美術館、ヤゲオ財団

---

● 収入

内訳	決算額	内訳	決算額
展覧会収入・その他の収入	21,811万円	企画準備等基本経費	13,703万円
		設営・運営等会場館経費	8,108万円
収入総額	21,811万円	支出総額	21,811万円